刀の価値

キシ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
刀の価値

【Ｎコード】
Ｎ５８７１Ｋ

【作者名】
キシ

【あらすじ】
２振りの太刀が抱える思い。己が太刀であるが故の苦悩。込められた思いとは、如何に意味をなすのか？

我が生まれた時の事。
今でも鮮明に覚えている。
燃えたぎる炎に焙られ、槌で叩かれ、石で研がれ。
我を生み出した者は、我に願った事

『万物を切り裂け』

そのただ一つだった。

我が名は『村正』
『妖刀』の名を持つ呪われた太刀なり！

私が生まれた時の事。
今でも鮮明に覚えています。
炎の包まれ、槌で伸ばされ、研ぎ石で研がれ、研磨され。
私を作った人は私に願った

『弱気を守り、強気を挫く』

その願いただ一つ

私の名は『正宗』
『大義』の肩書を持つ太刀なり

我々が生まれてすぐ、我らは川に刺された。
我『村正』が先に刺された。
川から、流れてきた全ての物。
我、刀身に触れる全ての物を切り裂いた。
造作もない事だった。

次に私『正宗』の番だった
私を作った刀匠は、私に『村正』ほどの切れ味を求めた
川から流れてきた物。
しかし、流れてきた物は、私を避けて流れていった
私は何も切れなかった。
いや、この場合『切らなかった』

私達の刀匠の師匠が言った

『正宗は切るべきものを知っている大義の太刀なり』

それから私は『大義の太刀』と呼ばれ始めた

我、村正に向けて、刀匠の師匠は言った

『村正は全てを切る魔性の太刀なり』

何を寝ぼけた事を。
我々は太刀。万物を切らずにして存在の価値は無い。

我を魔性と言うのならば、この世に有る太刀は全て魔性なり。

それから我、村正は魔性の太刀として、古い祠に収められた。
何も切らずに、誰も切らずに・・・・
太刀として、これほど屈辱な事はない！
誰でも良い！！我を握り、誰かを切らせろ！！血を吸わせろ！！

それから、私は名のある将軍のもとに献上された。
そして、戦の場にかりだされた・・・・
『正義』と言うなの大義名分を掲げ、私は人切りの道具になった・・・・
幾人もの人の手に渡り、幾人もの人を殺めた・・・・
『大義』とは、『正義』とは何だろう？
もう、嫌だ・・・・・。人を切りたくない・・・・・・・。

幾数年の時が流れた。
我が日の目を浴びた時だった
我を収めた祠が開けれた。

祠を開けたのは、若い武士ばだった。
我を手に取り、武士は言った

『これほどの名刀をなぜ、錆びつかせる。この名刀は、妖刀などではない。人を守る為の太刀なり』

また、寝言をほざく者が現れた。
しかし、人を切れるのではあれば誰でも良い。

こうして、我は、幾数年ぶりの日の光を浴びた。
我を、携えた武士は様々な土地を旅した。
旅の途中、様々な者を切った。
悪漢、悪党、悪鬼と呼ばれていた者。
しかし、誰かを切った後。必ず誰かが、喜んだ。
村人、旅人。
そう、武士は『誰かが困っている時』以外我を抜こうとしなかった。
不思議な気持ちになった。
妖刀と恐れられ、人々から畏怖された我でも、人に笑顔を与える事が出来るのだった。

どれほどの戦を潜りぬき、どれほどの人を切ったのだろう・・・
私は数える事を止めた・・・。切った人の冥福を祈る事すら止めた・・・
所詮私は太刀。村正が言った通り、太刀は全て人切りの道具。
私は、自身を人の血で化粧し、考える事を止めた・・・
そんな時だった。
私の今の仕手が、一人の武士を切りに行く事になった。
あぁ、また私は血化粧するのか・・・。今度はどんな血が私を彩るのだろうか・・・

我を持つ武士が国から追われる事になった。
何故？彼は人を守る為に我を抜いた。人を切った。
国のように、己の欲のままに太刀を振った訳ではなかった。

我らが再び相まみえた時。
彼女は変わっていた。

再び私が彼を見た時。
我は変わっていた。

彼女に『大義』は無かった。
彼女に有ったのは、『虚無』と『血化粧』のみ。
美しき刀身は薄らと赤みを帯びていた。

今の彼にこそ『大義』。『守護の太刀』の名が似つかわしい・・・・
民を守る事の出来る誠の太刀・・・・
『妖刀』は私だった・・・・
血に飢え、血化粧にどこか嬉しさすら感じていた・・・・
あぁ、やはり私は呪われていた・・

我々は所詮は刀。
どんなに足掻こうと、想いを込めて作られようと、所詮我らを振う

のは仕手である者にゆだねられる。
我は、太刀である事を誇りに思う。
私は太刀である事を呪う。

妖刀と呼ばれた我でも誰かに笑顔に出来る。
大義と呼ばれながら、人々の笑顔を絶った。

我は、彼女を切る。
人の笑顔を守る為に！！

私は、彼を切る。
感情を殺して、仕手に身を任せ、今宵も私はこの身を血化粧で彩る・・・・

正宗と村正

妖刀と呼ばれた村正
大義と呼ばれた正宗
しかし、彼らは所詮は太刀。
いかに太刀に大義名分を掲げようと、彼らに声を発する口も、それ

を否定する手も足もない。
なにのなぜ人は、太刀に大義名分を押し付ける。
彼らの価値を決めるのは、それを扱う仕手にゆだねられるもの・・・・
一体、なぜ太刀に思いを込める必要があるのだろうか？

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5871k/

刀の価値

2010年10月8日13時12分発行